

精神保健ボランティアの精神障害者に対する態度

山田光子*, 北原亜紀子**

精神保健ボランティアを対象に, 精神保健ボランティアに対する考えと精神障害者に対する態度を明らかにすることを目的として調査を行った。A地域において1994年より作業所, 授産所などで, ボランティア活動が行われている。今回の調査の結果, 精神保健ボランティアは, そのボランティア活動を通して掛け橋的, 啓発的役割を果たしていた。精神障害者に対する態度は, 精神保健ボランティア講座やボランティア活動そのものを通して非好意的から好意的にと変化していることがわかった。

キーワード: 精神保健ボランティア, 精神障害者観, 態度, 精神科リハビリテーション看護

はじめに

精神保健ボランティアの養成は, こころの健康づくり促進事業や「障害者の明るいくらし」推進事業の一環として各地域で取り組まれている。また, 1996年に始まる障害者プランの策定において, 精神障害のリハビリテーションとノーマライゼーション推進のために, 7つの視点からの提言があった。すなわち, 1. 地域で共に生活するために 2. 社会的自立を促進するために 3. バリアフリー化を促進するために 4. 生活の質の向上を目指して 5. 安全な暮らしを確保するために 6. 心のバリアを取り除くために 7. 我が国にふさわしい国際協力・国際交流の計7項目である。

精神保健ボランティアの養成は, 1985年頃より各行政機関で養成講座が開催され報告されている。その内容は, 精神障害, 福祉, リハビリテーションなどの講演・講義が2~3回と作業所や精神科病院の見学が1~2回実施されていた。この講座修了者から精神保健ボランティア組織が結成され, 作業所・デイケアの手伝い, 「ハートふれあい事業」などの参画に発展し, 成果をあげていると報告されている¹⁾²⁾³⁾。精神保健ボランティアの役割は, 加納⁴⁾によると掛け橋的・啓発的役割が現状では強く求められているという。

学生実習が行われているA地域でも1994年から「こころの健康ボランティアの養成講座」が開始された。このこころの健康ボランティア養成の目的は, 障害者と共に暮らす積極的な地域づくりであるという。この地域では, この講座修了者により作業所や授産所へのボランティア活動が開始され着実に成果を果たしている。

目的

(1) 精神保健ボランティア活動の現状と役割について検

*看護学科 臨床看護学講座

**日本赤十字社医療センター

討する。

(2) その検討の中から精神保健ボランティアの精神障害者に対する態度やその変化について明らかにする。

研究方法

1 対象者

調査対象者は, 1994年よりA保健所で精神保健ボランティア講座を受講した者69名。

2 調査方法

調査内容は, ボランティア講座受講動機6項目, ボランティア活動に対して10項目, 精神障害者に対する態度について2項目であった。これらは, 村田⁵⁾岡上⁶⁾の調

表1 調査票(抜粋)

「こころの健康事業」であるボランティア養成講座についておたずねします。該当するところにをつけてください。

1. ボランティア講座をどこでしましたか。
2. ボランティア講座受講の動機はなんですか。
3. 2の動機は受講することで満たされましたか。
4. ボランティア養成講座をより多くの人に広めていくとよいと思いますか。

こころの健康ボランティア活動についておたずねします。

1. 現在ボランティア活動をしていますか。
2. 活動しているかたは, どんな活動をしていますか。
3. こころの健康ボランティア活動を始めたきっかけは何ですか。
4. どのくらいの回数活動していますか。
5. いろいろ活動していますか。
6. 当事者との関わりで良かったこと, またやりがいを感じられる場面がありますか。それはどんな体験ですか。
7. こころの健康ボランティアをしていて特に苦勞した点は何ですか。
8. こころの健康ボランティア活動をより多くの人に広めていくとよいと思いますか。

精神障害者に対しての考え方についておたずねします。

ボランティア養成講座, またはこころのボランティア活動をとおしてそれぞれの受講, 活動する前と, 活動したあとでは精神障害者に対して自分の中で変化したこと, そのきっかけになった出来事は何ですか

査を参考に自ら作成した。郵送による自記式調査法(表1)で、1998年9~11月に行った。有効回収率は87%であった。精神障害者に対する態度の分析は、村田⁵⁾の精神障害者に対する態度分析に基づいて行った。

結果

1 基本的属性

対象者の平均年齢は56±10.4歳であり、全て女性であった。年齢構成は図1に示す通りである。職業をもっている人は、20%で職業を持っていない人が73.3%であった。今までに他のボランティア経験がある人は68.3%、ボランティア経験のない人は26.3%であった。職業とボランティア経験の有無との関係では、職業をもっている人の73%、職業をもっていない人の70%の方が何らかのボランティアを体験していた。講座受講前に精神障害者との接触経験は、接触あり54%、接触なし46%であった。ボランティア経験のある人の方が精神障害者との接触経験が多く、ボランティア経験のない人の方が精神障害者との接触経験は少ない人が多かった。また、年齢の高い人の方がボランティアを多く経験していた。

2 精神保健ボランティア養成講座

受講経緯は、町村広報35%、講座終了者より20%、知人から15%その他16%であった。その他は町保健婦また

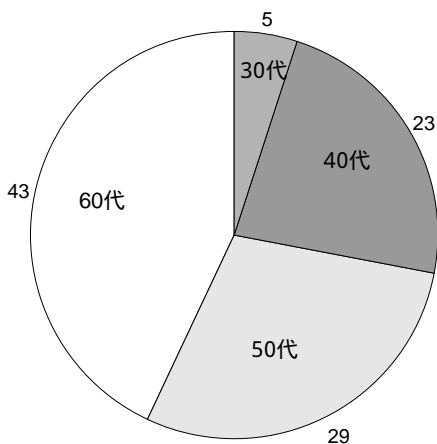


図1 年齢構成 単位 = % n = 60

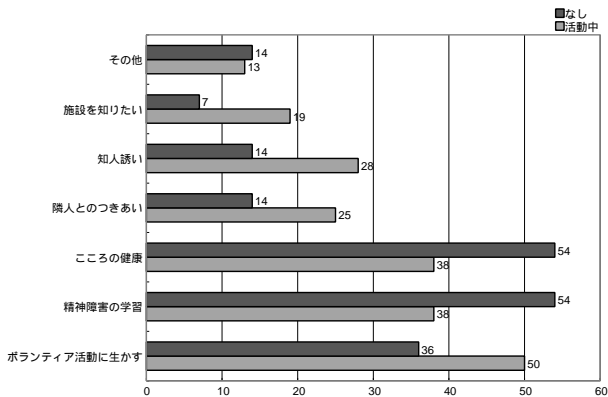


図2 ボランティア活動の有無と講座受講動機 単位 = % n = 60

は社会福祉協議会職員の薦めであった。

受講動機は、精神障害者について学習したい45%、自分のこころの健康に関心がある45%、ボランティアの活動に生かしたい43.3%、知人に誘われて23.3%、隣人とのつきあいのため20%、施設を知りたい13%、その他(保健婦等の誘い)13%であった(複数回答)。図2は現在のボランティア活動と講座受講動機を示したものである。

受講動機の満足度については、精神障害者について学習したいが満たされた人は41%、自分のこころの健康に関心がある48%、ボランティアの活動に生かしたい58%、知人に誘われて53%の方が満たされたと回答していた(複数回答)図3参照。

この講座を他の人に広めると良いかについては、良いと85%が回答した。その理由として「参加が精神障害を理解し、偏見がなくなると思う」「精神障害を広く理解してもらうため」「住民の意識が高められるため」と55%の人が回答した。またいいえ、どちらともいえないが8%あり少数意見ながら「どうして精神障害者だけにこのような講座があるのか疑問、スタートで既に精神障害者を特別視していると思う」との意見があった。

3 ボランティア活動

現在活動しているのは32人(53%)であった。活動内容は、作業所ボランティア78%、グループホーム夕食作り31%、諸行事への参加25%で(複数回答)、回数は月1~2回程度だった。活動年数は、2年前31%、1年前19%、3年前12.5%、5年前12.5%であった。

ボランティアの体験で良かったことがあるが91%であ

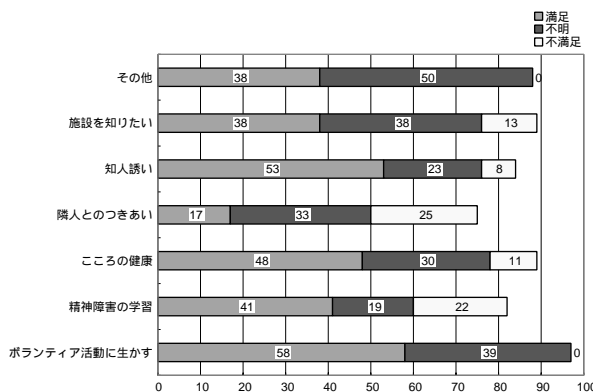


図3 ボランティア養成講座の動機と満足度 単位 = %

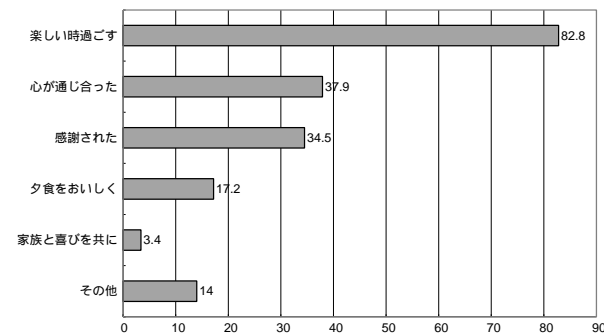


図4 ボランティアをしてよかったこと 単位 = % n = 32

り、その内容は対象者と楽しい時が過ごせた83%、こころが通じた38%、感謝された35%夕食をおいしく食べてもらった17%だった(複数回答 図4参照)

一方、対象者との関わりで苦労した点は、対象者への接し方38%であり、「話しかけるのが怖かった」「交流がスムーズにいかない」「どこまで話しを真剣に聞いてよいかわからない」などであった。さらにボランティアに関することが19%あり、その内容は「手伝える時だけ手伝えればいいと思って参加したが」「募集の仕方が不満」などであった。

ボランティア活動を広めると良いかについては、85%の人が広めると良いと回答し、その理由は障害者への理解が増える44%、ボランティア自身が成長する26%であった。15%はどちらとも言えないと回答し、その理由は明確ではなかった。

現在ボランティアをしていない人に「これからボランティア活動」をしたいかと質問したところ79%の方がしたいと回答している。その理由は「どんなことでもできることをしたい」であった。一方ボランティアをしたくない人の理由は、「時間的に無理」という回答がほとんどであった。

4 精神障害者に対する態度について

全体的に精神障害者に対する考えが変化した点について自由回答とした。回答を得たのは39人(65%)であった。その中で、受講前には好意的3人(8%)中立的17人(44%)非好意的19人(48%)だった。受講後には、好意的29人(74%)中立的10人(26%)非好意的0%と変化していた(表2参照)

表2 精神障害者に対する態度の変化 n=39 単位=人

		受講後			合計
		好意的	中立的	非好意的	
受講前	好意的	3	0	0	3
	中立的	9	8	0	17
	非好意的	17	2	0	19
	合計	29	10	0	39

(1) 精神障害に対する考え

「だれもが病気になる可能性がある」と記入があった人は、受講前2.3%受講後22.7%であった。「適切な治療によって治る病気」という考えに対して受講前に23%の方が非好意的だったのに比し、受講後は27%の方が好意的に変化がみられた。

(2) 精神障害者に対する態度

「時々なにをするか分からず恐ろしい」という考えに対して、受講前には5%、受講後には回答がなかった。「なんとなく怖い」と受講前に18%の方が思っていたが、受講後には回答がなかった。「共に話し合える友人になれる」という考えについて受講前は非好意的な人が23%だったが、受講後は好意的な人が34%に変化した。受講前に偏見があった人が11%であり、受講後には偏見がなくなると11%の人が回答している。受講前には、関心がなく他人事だった16%、特別な人だと思う9%専門職でなければ寄りつけない5%とやや非好意的な回答した

方が多かった。しかし受講後は、まじめ、誠実、明るい、素直、きれいなこころをもっていると好意的な回答が16%みられた。

考察

精神保健ボランティア講座(以下講座と略す)の受講動機は、ほぼ3点に集約され、自分のこころの健康に関心がある、精神障害者について学習したい、さらにはボランティアの活動に生かしたという具体性のあるものであった。講座の満足度も、その3点に関しては満足と答えた人が4割以上占め、特に「ボランティア活動に生かす」の満足度が高いことからこの講座は、精神保健ボランティアを前提にしていると受講者が意識していたのではないかと窺える。この講座を広めたいかという質問に対しては85%の人が広めたいと考えていた。これは、この講座によって精神障害者に対する偏見の解消につながると捉えていると考えられる。少数意見の中に、精神障害者のみにこのような講座があること自体がもう特別だと述べられていたが、この意見自体も偏見を解消したいという気持ちの現れであると考えられる。

精神保健ボランティアとして活動している人は、ボランティア講座受講者の53%であった。その動機は「人のために役立ちたい」と50%の人が思っており自然な形でボランティアを開始されている。一方ボランティア活動している21%の人が、まだボランティアは無理と思っていたがメンバーに組まれていたという戸惑いが表現されていた。同じようにボランティアをする上で苦労した点にも、募集の仕方に対する不満が述べられていた。ボランティア活動そのものに対しては、現在活動していない人も好意的に捉えられていることから、ボランティア募集の方法について意思の尊重が必要だと考える。

ボランティア活動ではやりがいを感じ、良かったとほぼ全員が答え、その内容は、対象者と楽しい時が過ごせたという回答がその殆どを占めていた。さらに苦労した点の回答は対象者への接し方が一番多く、話しかけ方や沈黙にとまどいを感じていた人が約4割あった。このことからボランティア活動を通してやりがいを感じるのも苦労するのも精神障害者に対する関わりであった。関わりの中に困難性もやりがいもあり、接触経験が精神障害者に対する態度に影響すると言われていることから、ボランティアを受け入れる側の配慮が必要である。

こころのボランティア活動の成果として、一緒に楽しい時を過ごし、精神障害者が共に話し合える友人として認識されたということは、加納⁴⁾の言う掛け橋の啓発的役割を果たしている現れなのではないだろうか。精神障害者に対する啓発的な役割とは、精神障害者をより理解することととらえると、講座終了者が講座を知人友人に紹介していることから、この行動は、啓発だけに留まらず啓蒙的役割も担っていると推察できる。精神障害者が、社会の一員として共生できる積極的な地域づくりというこの講座の目的は成果をあげていると考えられる。しか

しながら、ボランティア講座が精神障害者だけを対象として行われるのは不自然という指摘も最もであり、このような意識の人が増えることがノーマライゼーションを推進する上で重要なのではないかと考える。

精神障害者に対する態度は、明らかな変化があり、約半数の人がこころのボランティア活動を継続している事もその現れであろう。講座受講後には、非好意的な態度がなくなり、好意的な考えが飛躍的に多くなっている。澤本¹⁾によれば、精神保健ボランティアは精神障害者に対する態度や関心が高いと報告されている。これは、身近な交流体験が関与しているのではないかとされているが、今回の調査でも事前に精神障害者に対する接触体験が54%であった。接触体験の内容までは調査しなかったが、澤本¹⁾が述べるように精神障害者に対する態度に影響しているのではないかと考えられた。

精神障害は誰にでも起こりうるという精神障害に対する態度の変化は、講座の基礎的な学習の成果であると考えられる。精神障害者に対する考えも、「なんとなく怖い・何をするか分からず怖い」が23%だったのが、受講後には、回答がなかった。「友人になれるか」という質問に、受講前には非好意的な人が多かったが、受講後には好意的に大きく変化している。また、この講座を広めるとよいかという質問に対しても、85%の人が広めるとよい、その理由として、精神障害を理解し偏見がなくなると思うと回答している。また、ボランティア活動を広めると良いかという質問に対して、精神障害者に対する理解や自分自身の成長のためにボランティア活動を広めるのが良いと答えている。以上、講座受講とボランティア活動を通して精神障害者に対する態度は着実に好意的な態度へと変化していることが考えられる。

おわりに

今回、精神保健ボランティアの意識と精神障害者に対する態度について検討をした。意欲的にボランティア活動が行われている地域なので、意識や精神障害者に対する態度が好意的なのではないかと考えられる。しかし、限定された一地域であること、また態度測定が自由記載なので記載内容に限界があることにこの研究の限界があると言わざるをえない。アンケートに協力していただいた皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) 澤本宗彦他 精神障害者に対する意識調査報告 民生委員、看護学生、精神保健ボランティアの意識 神経精神医学会誌 Vol46. p49～58 1996
- 2) 菊谷令子 小林啓子 宮本ふみ他 精神保健福祉ボランティア講座の一考察～ボランティア育成地域への拡がり～ 東京都衛生局誌 p268～269
- 3) 児玉智子 池田ひとみ他 精神保健ボランティアについて こころの看護学1(4) p379～382 1997
- 4) 加納光子 コミュニティケアからみた精神保健ボラ

ンティア養成事業 病院・地域精神医学41(1) p6～8 1998

- 5) 村田美津子 地域における精神障害者の受け入れ基盤 一般婦人の意識調査 三重看護, 10, p87～95 1989

- 6) 岡上和雄, 石原邦夫 精神障害者に対する態度と施策への方向づけ 季刊社会保障研究 21(4) p373～385 1986

Abstract

Attitudes of mental health volunteers towards psychotic and mentally disturbed people

Mitsuko YAMADA* and Akiko KITAHARA**

The purpose of this study was to examine attitudes of the mental health volunteers towards psychotic and mentally disturbed people.

The volunteer activity has been done in the work place etc. at A aria since 1994.

The subjects of this study wear 60 persons.

We investigated the attitude towards psychotic and mentally disturbed people and the volunteer activity.

Acting the volunteer was 25 persons now. They were feeling that the volunteer activity was sibrnificant and happy.

Their attitude had changed in goodwill through the volunteer activity.

Key wards : Volunteer, Attitudes towards psychotic and mentally disturbed people, psychiatric rehabilitation nursing

*Yamanashi Medical University School of Nursing

**Japanese Red Cross Medical Center